

韓国人学習者の日本語アクセントの知覚と生成
Production and Perception of Japanese accent in Korean Learners

高橋 恵利子

Eriko Takahashi

1. はじめに

韓国語は日本語と文法構造が似ているため、韓国語¹を母語とする学習者(以下、韓国人学習者)は日本語の習得が早いと言われる(梅田 1985; 関 1989)。しかし、韓国人学習者の発音に関しては、ザ行音, /ツ/, などの分節音のみならず、文末のイントネーションや文全体の抑揚の不自然さも指摘されている(関 1989; 野間 2003)。その中で、韓国人学習者の日本語の韻律を記述した谷口(1990)、韓国人学習者の音読を母語話者に評価させた関(1989)は共に、韓国人学習者の日本語らしさを損なわせる大きな要因はアクセントであると指摘している。

日本語(東京方言)のアクセントは、次の音を下降させる働きを持つアクセント核の位置によって分類される。名詞においては、語中にアクセント核を持たない単語は平板式(平板型)に属し、後接する助詞は高く続く。語中にアクセント核を持つ単語は起伏式と呼ばれ、起伏式はさらに、アクセント核の位置によって頭高型、中高型、尾高型に分類される。名詞のアクセント型は、複合語を除くと語ごとに決まっており個々に記憶する必要があるため、学習者にとっては負担の大きい学習項目の1つである。特に韓国語ソウル方言は、音の高低パターンが語の弁別機能を持たないため、日本語のアクセントは意識されにくい。それに加え、韓国の日本語教育で単語アクセント指導が十分に行われていないことも、習得を遅らせる原因となっている。

多少アクセントが不正確であっても文脈で通じるという部分も確かにあるが、文脈に依存しなければ理解しにくいという状態は、聞き手に何らかの負担を与えていることになる。また「おじいさん」と「おじさん」、「大野さん」と「小野さん」の混同のような、一見、拍の誤用のように見える問題にアクセントが関与していることも多い。韓国人学習者に限らず、ある程度日本語が自由に話せるようになり、より自然な日本語を話したいと望むようになった段階でアクセント学習の必要性を認識する、という学習者は少なくない(戸田 2006)。しかし、単語アクセントの習得にどのような能力や練習が必要なのかは十分に解明されていない。

¹ 朝鮮半島で使用される言語の呼称としては「韓国語」の他、「朝鮮語」、「ハングル語」があるが、本論では大韓民国での正式名称である「韓国語」を用いる。

教室でのアクセント指導や誤用訂正場面では、新出単語のリピートやミニマルペアの聞き分け、核位置の聞き取りといった知覚を重視した指導が見受けられる。これはおそらく、聞き取れなければ発音できないという発想が根底にあるためだと思われる。しかし、正しいアクセントで生成するためにはその語のアクセントパターンを記憶している必要がある。例えば/ア^ˈメ/と/ア^ˈメ/の違いを聞き分けることができても、「雨」がどのようなピッチパターンで実現されるかを知っていなければ正しいアクセントで生成することができない。つまり高低パターンを知覚する能力が、正しいアクセントで生成する能力に直接的に結びつかない可能性がある。しかし、語アクセントの生成と音の高低の知覚力にどの程度関連があるのかは、調査方法の難しさもあり、十分に解明されていない。仮に、高低パターンの知覚力とアクセント生成の関係が弱いものであれば、従来の知覚ベースの練習を見なおす必要が出てくる。

2. 先行研究

韓国人学習者の日本語アクセント生成傾向については、日本語のアクセントが守られていない（関 1989）、母語の音調が持ち込まれる（金 1992）、句末から2拍目、3拍目で下がるものや平らに続くものが多い（大西 1990）といった特徴が指摘されている。特に、中国・日本から韓国に移入された漢語・漢字語で発音が類似する単語（例、「신문（新聞）」[ʃinmun]、「운동（運動）」[u:ndog]）や、「호텔（ホテル）」[hot^heɪ]のような外来語に、母語の音調が持ち込まれやすくなるという（金 1996；野間 2003）。アクセントの型に注目した稲田（2011）は、単語読み上げ課題の結果を分析し、刺激語の拍数や音節構造にかかわらず、2拍目で高く読まれたものが最も多かったとしている。なお、語頭から2拍目で高く読まれる型は中高型に相当するが、韓国人学習者の中高型の多用傾向は他の研究においても指摘されている（大西 1990；戸田 1999；福岡 2008）。これは、第2音節が高く発音される韓国語の韻律傾向（趙 2007）が持ち込まれたものと考えられる。

このほか福岡（2008）は、語頭音の有声性の有無によって、日本語の単語を読み上げる際に語頭音の高さが異なることを示している。中東（2001）は韓国人のアクセントは音節単位で付与されていることを示し、単語の音節構造もアクセント生成に影響を与えると指摘している。

知覚においては、日本語のアクセントの型が学習者にどの程度聞き分けられるのかといった点に関心が向けられてきた（鮎澤 1999, 2003；鮎澤・西沼・李・荒井・小高・法貴 1995；李・鮎澤・西沼 1997；鄭 2001）。知覚テストには、刺激単語を聞かせ、単語がひらがなで書かれた解答シートにアクセントの下がり目を記入させるという方法が広く採られている。調査結果から、アクセント型によって

知覚の難易度が異なることが明らかとなり、特にピッチ下降を伴わない平板型と、一拍目のみ高く発音される頭高型の特定は、比較的早い段階で習得されることが報告されている(李他 1997, 鮎澤 1999 など)。李他は、韓国人学習者を対象とし、アクセント知覚成績上位群・中位群・下位群それぞれのアクセント型別正答率を比較した。その結果、平板型の成績は3群とも概ね高いが、頭高型の正答率が群間の成績の差をもたらしていることから、知覚においては頭高型アクセントがもっとも習得しやすいアクセントであると結論づけた。しかし、鮎澤らの調査で用いられた「東京語アクセント聞き取りテスト」は、漢語を含む有意味語を用いている点、単語の長さや音節構造、アクセント型など知覚に関わる要因の統制が不十分である点、尾高型と平板型を区別していない点などに改善の余地がある。

アクセント型以外では、単語の音節構造(助川・佐藤 1994)や、文節音(鄭・桐谷 1998)もアクセント知覚に影響することが指摘されている。

これらの先行研究は、韓国人の日本語アクセント知覚または生成に影響をもたらす特定の要因について調査したものであり、知覚と生成の関係は十分に扱われてこなかった。果たして、アクセントの聞き取り能力の高い学習者ほど、正しいアクセントで生成できると言えるのであろうか。本調査は先行研究の知見を踏まえ、知覚と生成に影響する要因を統制した上で、無意味語の弁別課題と有意味語の読み上げ課題を用い、両変数の相関を検討する。

3. 調査概要

3-1. 対象者

アクセント生成を扱う本調査では、正しいアクセント型を知っていることが想定できる学習者を対象とする必要がある。課題の内容から考えて、基本的な語彙の知識があり、即時的な反応が可能なレベルであることが求められる。しかし、個人や単語によってアクセントの知識に偏りがあるため統制が難しい。そこで本調査では、日本に1年以上在住する留学生で日本語能力試験2級以上を持つ者、また韓国在住の大学生・大学院生²で、日本に一定期間滞在し、実際の言語使用を通じて日本語のインプットを受けた経験を持つ日本語能力試験1級(またはN1)合格者を対象者の条件とした。語ごとのアクセント知識の形成にどの程度の時間及びインプット量が必要なのかといった判断材料がなく、学習者の属性や学習志向によっても異なることが想定されるため、本調査では暫定的に10ヶ月以上³の日本滞在経験を条件とした。また、日本滞在経験がなくともインターネット等を通じて十分なインプットを受けることは可能であり、メディア媒体で日本語を習

² 対象者には、日本での就業経験を持つ大学院生も含まれている。

³ 韓国の大学における交換留学期間は、通常半年か1年であるが、実質的にはそれに満たないことを考慮し、10ヶ月以上とした。

得している学習者も存在するが、条件の統制が困難であるため除外した。対象者は70名⁴（女性50名，男性20名），内訳は国内留学生21名，日本滞在経験を持つ学習者は49名である。平均日本語学習歴8.3年（2年から20年），平均滞日期間は2.4年（10ヶ月から9年），平均年齢は25.9歳（19歳から36歳）であった。滞日経験を持つ韓国の対象者の約94%は日本語関連領域を専攻する学生であるが，日本国内の対象者は日本語専攻学生が5名（24%）で，他は理工系，法学，朝鮮語，建築などであった。

3-2. 読み上げ課題

対象者のアクセント生成力を測定するために単語読み上げ課題を課した。課題に用いた刺激語を表1に示す。刺激語はアクセント型ごとに8語，計32語で，全て助詞「が」をつけて呈示した。先行研究の知見を踏まえ，語頭の有声性に偏りが生じないように，語頭音が有声音である単語と無声音である単語を各アクセント型に4語ずつ配置した。単語の選定基準は，日本語能力試験2級以下相当の3拍の単語で，ザ行音や歯茎破擦音/ツ/を含まない単語とした。アクセントにゆれのあるものは排除した。

表1. 読み上げ課題の刺激語

語頭音	頭高型	中高型	尾高型	平板型	計
有声	緑が めがねが 命が 涙が	あなたが 匂いが おもちゃが お菓子が	休みが 仲間が 男が 明日が	昔が 大人が 後ろが 南が	16
無声	花火が 二十歳が 彼らが 世界が	花屋が 子猫が 卵が 砂糖が	言葉が 鏡が 話が 光が	仕事が 車が 今年が 手紙が	16

3-3. 弁別課題

アクセントの知覚力を測るためには，知覚を何らかの形で表出させる必要がある。多くの先行研究では，刺激音声を聞いて，解答用紙に核位置を記入する方法を採用しているが，実際には知覚と記述が一致していないケースが見られる（高橋 2011）。また，有意味語の場合，単語によってはアクセントを覚えており聞かなくても答えられるということも考えられるため，本調査では無意味語を用いた

⁴ ピッチパターンが語の弁別機能を持つとされる慶尚道方言話者は除外した。

ABX 弁別法を採用した。ABX 法は、先行呈示される刺激 A と刺激 B から、最終呈示される刺激 X と同じ刺激を特定する課題であるが、対象者の能力を測定するには比較的弁別力の低い課題である。課題の難易度を上げるため、刺激 X が刺激 AB のどちらとも一致しないパターンを加えた。これにより対象者は 3 刺激全てを聞かなければ正解できないことになり、正答のチャンスレベルも 50% から 33% に下がる。また予備調査の結果から、刺激語間の核位置に近いものほど弁別困難で、特に尾高型のアクセント型の正答率が低いことがわかったため、尾高型と中高校、尾高型と平板型を組み合わせた問題を多くした。刺激 AB のアクセントの組み合わせを表 2 に示す。例えば、刺激語「かごよが」の場合は刺激 A と B に頭高型と中高校を用いたことを示す。使用した無意味語は 12 語である。

刺激語に無意味語を用いることで、アクセントの既有知識の影響を排除し分節音による影響を統制した。無意味語作成にあたって幾つかの点に留意した。まず、母音の無声化を避けるため母音は/a/ /e/ /o/に限定した。3 拍語を中心としたが、課題の難易度を上げるために 4 拍語の中高校同士の弁別課題（/あら¹めけ/と/あらめ¹け/の弁別など）を加えた。また音節内下降を含む形容詞タイプ「めけない」を混在させ、課題が単調になることを避けた。3 拍語、4 拍語ともに名詞タイプには助詞「が」をつけて呈示した。

表 2. 刺激語と呈示アクセントの組み合わせ

	頭高型	中高校	尾高型
中高校	かごよが	あら ¹ めけが (あらめ ¹ けが) とご ¹ めねが (とごめ ¹ ねが) めけ ¹ ない (めけな ¹ い)	
尾高型	ねたかが	もた ¹ かが, たよ ¹ ほが, とめ ¹ ねが, たらよ ¹ ほが	
平板型	らげねが	めけ ¹ ない	せだわが

刺激音声の呈示は Dupoux *et al.* (1997) を参考に、刺激 AB は 2 名の女性が、刺激 X は男性が読み上げたものを用い、刺激 AB の呈示順序、及び 2 つの女声の呈示順序を変えて呈示した。刺激総数は 48 で、正答数に偏りが生じないように刺激 X を配置した。

3-4. 手続き

対象者に調査協力の承諾を得たあと、読み上げ課題から始めた。対象者に、パソコン画面上に表示される単語を、分かる範囲でできるだけ早く正確なアクセントで読み上げるよう教示した。単語の漢字にはルビがつけられており、単語は 3 秒ごとにランダムで呈示された。4 問の練習試行の後、対象者の了承を得て本試

行 (32 問) に移った。所要時間は 2 分程度であった。この過程は全て録音された。続いて弁別課題を実施した。対象者は 500ms 間隔で連続して呈示される刺激音をヘッドセットを通して聴取した。1 試行の刺激音声は図 1 のように構成されている。まず問題開始を知らせる Beep 音の後、刺激 A、刺激 B、刺激 X が 500ms 間隔で連続して呈示される。対象者は最終刺激が「刺激 A と一致」「刺激 B と一致」「一致なし」のいずれであるかを判断し、赤・青・緑の色で指定されたパソコンのキーを入力することで回答するよう求められた。回答に与えられた時間は 3000ms であったが、回答が入力された時点で次の問題が呈示された。10 問の練習試行を実施し、回答方法が理解できたことを確認した上で、課題を実施した。48 問を 16 問ずつ 3 セットに分け、小休止をはさみながら実施した。小休止の時間は対象者の任意で、準備ができたならスペースキーを押して自分で次のセットを再開するように指示した。所要時間は、説明や練習を含め 10 分程度であった。

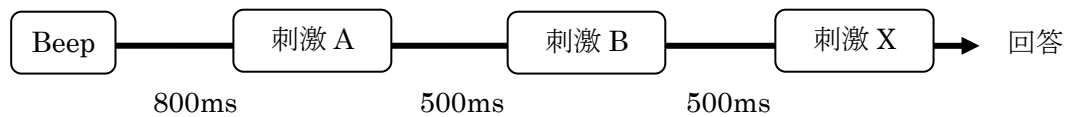


図 1 アクセント弁別課題の 1 試行における呈示刺激

4. 分析

読み上げ課題は 32 の刺激について、下降位置の適切さを調査者が評価し 1 問 1 点で集計した。総得点は 32 点であるが、分析にあたってはパーセンテージ数値に換算した正答率を用いた。

弁別課題は、呈示された刺激と対象者の選択を照合し採点した。変則的な ABX 法であったため 3 肢選択課題となったが、採点に重み付けはせず 1 問 1 点、総点 48 点で集計し、パーセント数値に換算した正答率を分析に用いた。

5. 結果

本調査は学習者のアクセント生成力と知覚力の関係を探るものであるため、調査時の学習環境の違いは考慮に入れないが、念のため課題ごとに Student の t 検定で平均値の差を検証した。その結果、両群に有意差は認められなかった (読み上げ: $t(68)=-1.28, p>.05$, 弁別: $t(68)=-1.59, p>.05$)。表 3 に各群の課題成績を示す。

読み上げ成績の正答率は 50% 以下であることから、ある程度、日本語のインプットを受けたことのある上級学習者でも単語のアクセントは正確には定着して

いないことが指摘できる。一方、弁別課題の正答率は50%を超えているが、読み上げ課題に比べばらつきが少ない。以上のことから、生成力のばらつきに比べると知覚力の個人差はさほど大きく、生成成績の差は単語アクセントの定着度によって生じると考えられる。

表 3. 各群の課題成績 (%)

	韓国 ($n=49$)		日本 ($n=21$)		全 ($n=70$)	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
読み上げ	42.9	19.6	37.1	11.5	41.2	17.6
弁別課題	54.2	13.9	48.3	14.8	52.4	14.2

次に読み上げ課題成績と弁別課題成績の散布図を図2に示す。読み上げ課題成績と弁別課題成績には $r=0.43$ ($p<.01$) の中程度の相関が認められた。読み上げ成績が低く弁別成績の高い対象者は、微細な高低パターンを聞きわけることができるが、語アクセントを正確に記憶していないことを示すものである。

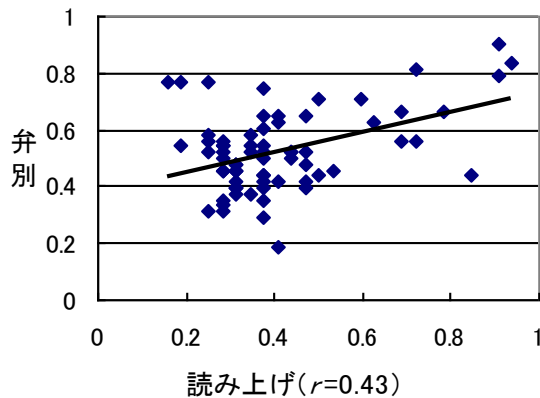


図2 読み上げ課題と弁別課題の散布図

6. 考察

本調査は、従来十分に検討されていなかった単語アクセントの生成力とアクセント型の知覚力との関係を調査した。有意味語の読み上げ課題と無意味語の弁別課題を用いた調査の結果、両課題成績に中程度の相関が認められたことから、高低パターンを弁別する能力は、正しいアクセントで生成する能力とある程度関係があることが分かった。分節音と異なり、アクセントは語ごとに記憶する必要があるため、知覚と生成が直接的にはつながりにくいと考えられるが、本調査の結果は、高低パターンの弁別力の高い学習者ほど、単語読み上げ時のアクセントが

正確である傾向を示している。因果関係を扱ったものではない点に留意する必要があるが、知覚が生成に先行するという立場をとるなら、インプットから徐々に語アクセント情報が蓄積されていく可能性が指摘できる。

しかし中程度の相関が見られたとはいえ、生成課題の正答率は50%に満たないことから、インプットだけでは正確な語アクセントを習得することは困難であると言える。弁別成績が高くとも読み上げ成績が低い対象者もいることから、アクセント生成力は知覚だけではなく、知覚したアクセントを覚えようとする学習意欲やアクセントの意識化の影響も大きいと考えられる。アクセント指導においては、従来のような核位置の聞き取りやミニマルペアの弁別練習も重要であるが、型を意識させ、記憶させる活動も必要であると言えよう。

今回は無意味語を用いたABX法で知覚力を測定した。無意味語を用いたことで生成と知覚を分離して扱うことができたが、高低パターンの異同を判断する能力と、モデル音から核位置を聞き取る能力が同じものであるかどうかは検証する必要がある。また、変則的なABX法を用いたことで課題の難易度が調整できたが、アクセント型ごとの知覚の難易度を検討することはできなかった。知覚と生成に相関が見られたことから、知覚困難なアクセント型は定着しにくい可能性が考えられる。調査材料を改変したうえで検討する必要がある。

アクセントの知覚力が生成力と関係を持つことは指摘できたが、指導に還元するには解決すべき課題が山積している。特に問題となるのは膨大なアクセント情報をいかに蓄積していくのかという点であるが、規則性のあるアクセントについて知識を導入しても、直ちに自然な生成にはつながらないことが報告されている(高橋・松崎・関 2009)。アクセントの習得には、学習意欲や音のパターンの記憶、発音の自己モニターといった知覚以外の要素の関与も指摘されている。これらがそれぞれどのように生成に関わるのか、生成力と最も強くかかわるのはどの要素か、今後さらに範囲を拡大し多角的な調査を進める必要がある。

【参考文献】

- 鮎澤孝子 (1999) 「中間言語研究—日本語学習者の音声—」『音声研究』第3巻第3号, pp. 4-12.
- 鮎澤孝子 (2003) 「外国人日本語学習者の日本語アクセント・イントネーション」『音声研究』第7巻第2号, pp. 47-58.
- 鮎澤孝子・西沼行博・李明姫・荒井雅子・小高京子・法貴則子 (1995) 「東京語アクセント聴取実験結果の分析—10言語グループの結果—」『新プロ「日本語」総括班第二回研究報告回予稿集』(<http://www.ninjal.ac.jp/archives/jalic/group5/95.10.14p25.pdf>) 2013年8月13日閲覧.
- 李明姫・鮎澤孝子・西沼行博 (1997) 「ソウル出身日本語学習者の東京語アクセントの知覚」『日本学報』(韓国日本学会) 第38号, pp. 87-98.

- 稲田朋晃 (2011) 「韓国人日本語学習者のピッチ実現に影響を与える要因—音韻構造と語頭子音の音の有無を中心に—」『言葉と文化』第 12 号, pp. 1-17. (名古屋大学大学院国際言語文化研究科) .
- 梅田博之 (1985) 「韓国人に対する日本語教育と日本人に対する朝鮮語教育」『日本語教育』第 55 号, pp. 48-58.
- 大西晴彦 (1990) 「韓国人の日本語のアクセントについて」『国際学友会日本語学校紀要』第 15 号, pp. 53-60.
- 金仁和 (1992) 「韓国人学習者の日本語の韻律における母語の干渉—文レベルでの干渉—」『日本語の韻律に見られる母語の干渉—音響音声学的対照研究—』D1 班, H2 年度研究成果報告書, pp. 65-79.
- 金仁和 (1996) 「単語の韻律における日・韓両言語の対照—韓国語が母語の場合の母語の干渉を中心として—」『文芸言語研究 (言語篇)』第 30 号, pp. 73-87. (筑波大学) .
- 助川泰彦・佐藤滋 (1994) 「韓国人学習者の日本語アクセント知覚における音節構造の影響」『東北大学留学生センター紀要』第 2 号, pp. 27-32.
- 高橋恵利子 (2011) 「韓国人日本語学習者のアクセントの知覚と生成」『日語日文學研究 日本語学・日本語教育学篇』第 78 輯 1 卷, pp. 59-79, (韓国日語日文學会) .
- 高橋恵利子・松崎寛・関光準 (2009) 「韓国人 JFL 学習者に対する韻律指導—音読課題の誤用分析を中心に—」『日本語教育の過去・現在・未来 第 4 卷音声』水谷修監修, pp.118-138. 凡人社.
- 谷口聡人 (1990) 「韓国語を母語とする学習者の韻律的傾向について」『日本語音声』研究報告 3, pp. 62-64.
- 趙義成 (2007) 「文字と発音の指導法」『韓国語教育論講座 1』, pp. 371-386. くろしお出版.
- 鄭樹漢 (2001) 「日本語学習者の日本語アクセント—ソウル方言話者と慶尚道方言話者の語アクセントと複合語アクセント—」『大阪樟蔭女子大学日本語研究センター報告』第 9 号, pp. 29-38.
- 鄭恩楨・桐谷滋 (1998) 「ピッチパターンが日本語の有声・無声の弁別に与える影響—韓国語母語話者と日本語母語話者の比較—」『音声研究』第 2 巻第 2 号, pp. 64-70.
- 戸田貴子 (2006) 「第二言語における発音習得プロセスの実証的研究」『科学研究費補助金研究成果報告書』基盤研究 (C) (2).
- 戸田貴子 (1999) 「日本語学習者による外来語使用の実態とアクセント習得に関する考察: 英語・中国語・韓国語話者の会話データにもとづいて」『文芸言語研究, 言語篇』第 36 号, pp. 89-111. (筑波大学) .
- 中東靖恵 (2001) 「単語読み上げにおける韓国人日本語学習者のピッチ実現」『日本語教育』第 109 号, pp. 80-89.
- 野間秀樹 (2003) 「朝鮮語母語話者の日本語ピッチアクセント教育のために」『韓国語母語話者の日本語音声研究論文集』, pp. 57-71. (東京外国語大学鮎澤研究室) .

- 福岡昌子 (2008) 「韓国人日本語学習者のアクセント習得における母語干渉—語頭破裂音を含む語のアクセント—」『三重大学国際交流センター紀要』第3号, pp. 45-59.
- 関光準 (1989) 「韓国語話者の日本語音声における韻律的特徴とその日本語話者による評価」『日本語教育』第68号, pp. 175-189.
- Dupoux, E., Pallier, C., & Sebastian, N. (1997). A distressing "deafness" in French? *Journal of Memory and Language*, 36, 406-421.